

昔むかし、あるところに、ひとりの王さまがいました。王さまには、とても美しいおひめさまがありました。

おひめさまが年ごろになると、王さまは、ノミをいっぱい飼って、えさをどんどんあたえて太らせ、ノミがラクダほどの大きさになると、殺して皮をはぎました。そして、「この皮がなんの皮か、いい当てたものをひめと結婚させる」というおふれを出しました。

国じゅうの若者がお城にやってきましたが、だれひとり、なんの皮かいい当てることはできませんでした。

あるとき、王さまの家来が、井戸で水をくみながら、

「ばかなやつらだ。あの皮がノミの皮だって、だれもいい当てられないんだから」とひとりごとをいいました。

井戸の中に、巨人のデーフがすんでいて、このつぶやきを聞きました。

つぎの日、デーフはまずしい男に化^ばけて、王さまのお城にやってきました。そして、門番に、

「あの皮がなんの皮かいい当てられたら、王さまは、ほんとうにおひめさまと結婚させてくれますか」とききました。門番は、

「おまえみたいなみすばらしいやつに、いい当てられるわけがない」といって、追いかえしました。

デーフは、つぎの日もやってきました。三日目には門番はうんざりして、とうとう王さまに、

「毎日、みすばらしい男がやってきて、あの皮がなんの皮かいい当てられるといってくださいません」といいました。

王さまは男をよびいれるよう命じました。

男がやってくると、王さまは、皮を見せて、

「これがなんの皮か、おまえにわかるのか」とききました。男は、

「王さま、これはノミの皮です」とこたえました。

王さまはびっくりして、男を追いかえました。けれども、男は、毎日お城にやって

きて、約束どおりおひめさまと結婚させてくれといいつづけました。そして、

「約束を守ってくださいさなければ、この国に大きな不幸がおとずれますよ」とおどしました。

それでも王さまは、おひめさまをこのまずしい男と結婚させる気になれませんでした。とうとうある日、男は怒って、かぶっていたぼうしを空高く放り投げました。たちまち空がくもって、国ぜんたいが霧^{きり}におおわれ、まるで夜のように暗くなりました。それが一週間も続いて、国じゅうの人たちがおどろきおそれました、王さまは、男に、

「どうかもとどおりにしてくれ。そうしたら、ひめと結婚させよう」といいました。

男は、すぐにぼうしを地面によびもどしました。たちまち国ぜんたいに光がさしこんで、すっかり明るくなりました。王さまは、ようやくこの男の正体が巨人のデーフだと気付きました。王さまは、おきさきにいいました。

「しかたがない。ひめと結婚させなければ、デーフは国をほろぼすだろう。ひめには、なんでもほしいものを持っていかせよう。そして、お供^{とも}として男を四十人と女を四十人、それに黄金をつんだろばを四十頭連れて行かせよう」

つぎの日、デーフがおひめさまをむかえに来ました。おひめさまは、王さまに、馬を一頭もらいたいといいました。

王さまの馬小屋には、小さなまほうの馬がいました。おひめさまが馬小屋に行くと、まほうの馬はいいました。

「どうぞ、わたしをつれていってください。そして、鏡と、くし、それから塩をひとつかみと、ナデシコの花を一本持っていきなさい。いつか役に立ちますから」

おひめさまは、まほうの馬に乗り、デーフのあとについて旅に出ました。

ずいぶん遠くまでやってきたとき、デーフは、お供の四十人の男と四十人の女、それ
にろばを四十頭、つぎつぎに食べてしまいました。

やがて、あるほら穴^{あな}の前まで来ると、デーフは中へ入って行って、たくさんの骨^{ほね}を外へ投げだしはじめました。まほうの馬はおひめさまにささやきました。

「あれは、デーフが食い殺した人間の骨です。あなたもすぐに食べられてしまいます。

さあ、わたしにむちを強く当てなさい。走りますから」

おひめさまがむちでひとうちすると、まほうの馬はすごいいきおいで走りだしました。山をこえ、谷をこえてかけていきました。

ディフがほら穴から出てくると、おひめさまのすがたがありません。見まわすと、はるか遠くに、馬に乗ってかけていくおひめさまが見えました。ディフは、天にむかつてふうつと息をはきました。たちまち雪がふりはじめ、はげしいふぶきになりました。

まほうの馬は、思うように走れなくなってしまいました。ディフは、おそろしいはやさで追いかけてきました。ディフがすぐ後ろまで追いついたとき、まほうの馬がおひめさまにさけびました。

「ナデシコの花をうしろへ投げなさい」

おひめさまはナデシコの花を投げました。たちまち、ディフは遠くうしろにはなれてしまい、おひめさまとのあいだは、とげのあるいばらで、びつしりとおおわれました。ディフが大声でさけびました。

「おーい、わたしのはなよめさん、ずいぶん遠くへ行ってしまったな。
教えてくれ。」

こんなに広いいばらの原を、
いったいどうやってぬけていったんだい」

おひめさまはさけびかえました。

「生まれたままの、
まるはだかで、
いばらの原を、

ころがってきたのよ」

ディフはさっそく着物をぬいでまるはだかになると、いばらの原をころがりはじめました。とげがささって体じゅう血だらけです。あまりの痛^{いた}さにディフはなんども立ちどまりました。そのまにおひめさまと馬は、どんどん先へにげていきました。

ディフは、ようやくいばらの原を通りぬけると、またおひめさまを追いかけてきました。もう少しで手がとどくところまで来たとき、まほうの馬がさけびました。

「塩を投げなさい」

おひめさまが塩を投げたとたん、ディフはまたはるかかなたに遠ざかりました。ふたりの間はさつきよりもっと開いて、塩と砂でびつしりおおわれました。ディフは大声でさけびました。

「おーい、わたしのはなよめさん、ずいぶん遠くへ行ってしまったな。」

教えてくれ。

砂と塩のこの海を、

いったいどうやってわたっていったんだい」

おひめさまはさけびかえました。

「シャツも上着もぬぎすて、

まるはだかで、

砂と塩の海を、

ころがりながらわたって来たのよ」

ディフは、また着物をぬいで、砂と塩の海をころがりはじめました。いばらで傷ついたはだに砂がこすれ、塩がしみて、痛いこと。ディフは、なんども立ちどまりながら、ほんの少しずつしか進めませんでした。けれども、しばらくすると、またものすごいきおいで追いかけてきました。あとひと息で追いつくというとき、まほうの馬がさけびました。

「くしを投げなさい」

おひめさまがくしを投げると、ディフとの間はずっと開いて、高い山がそびえ立ちました。

ディフが、大声でさけびました。

「おい、わたしのはなよめさん、
教えてくれ。

こんな高い山を、

いったいどうやってこえていったんだい」

おひめさまはさけびかえました。

「自分の歯を二本ぬき、

それで穴をほって、

山をぬけて来たのよ」

ディフは、あつというまに歯を二本ひきぬき、それで山のまんなかに穴をあけはじめました。ディフがようやく山をぬけたときには、おひめさまはもう、はるか遠くへ逃げていました。けれども、ディフはまた追いついてきました。まほうの馬がさけびました。

「鏡を投げなさい」

おひめさまが鏡を投げると、後ろに流れのはやい広い川が、あらわれました。

デーフが、大声でさけびました。

「おーい、わたしのはなよめさん、
教えてくれ。」

この川を、

いったいどうやってわたっていったんだい」

おひめさまはさけびかえました。

「大きな石を、

首にくくりつけて、

いちばん深いところへ、

とびこんだのよ」

デーフは、大きな石を首にくくりつけて、川のいちばん深いところめがけて、ざぶんととびこみました。そして、石の重みでそのまま川底へしずんでしまいました。

おひめさまが、そのまま馬を走らせていくと、一軒いっけんの小屋がありました。おひめさまが、馬を下りて小屋の前でひと休みしていると、おじいさんが薪まきをかついで帰ってきました。おひめさまが、

「馬といっしょにひと晩泊めていただけませんか」というと、おじいさんは、

「ばあさんのゆるしがなければ、小屋の中に入れることはできないよ。すぐにきいてくるから、ちよっと待っていてくれ」といいました。まもなく、小屋からおばあさんが出てきて、

「どうぞ泊りなさい」といって、おひめさまを馬小屋に案内しました。

おひめさまは、馬をつなぐと、馬のそばでひと晩じゅう起きていました。

あくる朝、おひめさまは、馬小屋の外で腰こしを下ろしているうちに、横になって寝てしまいました。

この日、この国の王さまが、鷹狩たかがりをしていました。王さまが鷹を放すと、鷹は獲物えものを追いかけないで、どこかへ飛んでいってしまいました。王さまは、家来に鷹をつかまえるように命じました。

家来が鷹を追っていくと、小屋の前に出ました。そこに美しい娘が眠っていて、娘の頭に鷹がとまっていました。けらいは、引きかえして、王さまにいいました。

「鷹は、眠っている娘の頭にとまっていました。その娘はこの世のものとは思えないほど美しく、わたしは氣を失って倒れそうになりました。それで、鷹をつかまえてくることができませんでした」

王さまは、こんどは自分で馬に乗り、鷹をつかまえにきました。ところが、王さまは、娘を見るやいなや、あまりの美しさに氣を失って倒れてしまいました。

そのとき、おひめさまが目をさしました。おひめさまは、小屋にかけこんで、おばあさんに、

「あそこに倒れている人がたずねたら、わたしを自分たちの娘だといってください」といいました。

しばらくすると、王さまは目をさまして、大臣の所にもどり、

「あの小屋に行つて、美しい娘が住んでいるかどうかきいてこい。その娘を妻にしたい」といいました。

大臣はすぐに出かけていっておじいさんとおばあさんにききました。ふたりは、

「はい、わたしどもには娘がおります」とこたえました。そして、「お申し出はありがたいことですが、わたしどもはあまりにまずすぎます」といって、断りました。

王さまは、こんどは自分で出かけていき、娘をお城につれて帰りました。

王さまは娘と結婚し、お祝いは四十日間も続きました。おじいさんとおばあさんは、黄金を積んだろばを四十頭と、たくさんのおくりものをもらいました。

王さまと、お妃は、なかよく幸せにぐらししました。そして、しばらくすると、お妃に子どもが生まれることになりました。

ある日のこと、王さまは、遠い国に出かけることになり、お妃に、

「おまえの馬をかしてくれないか」といいました。お妃は、馬小屋に行つて、まほうの馬に、

「王さまがあなたをつれていきたいとおっしゃるのです」といいました。まほうの馬はこたえました。

「どうぞ、わたしをかしてあげなさい。ただ、その前に、わたしのたてがみを二、三本ぬいて、だいじに持っていてください。もしあなたの身に何か不幸なことが起こったら、そのたてがみをもやしなさい。すぐに、あなたのところにかけてくれますから」

お妃は、まほうの馬のたてがみをぬいて、だいじにしまっておきました。

ちょうどそのころ、巨人のディフは、川底でさんざんもがいたあげく、ようやく川からぬけられました。そして、お妃の住んでいる国にやってきて、水車小屋の粉こなひきとしてやとわれました。

やがて、お妃は、ふたごの男の子をうみました。国じゅうが大喜びして、知らせを持った使いの者が王さまのもとへつかわれました。

使いの者が馬に乗って水車小屋のそばを通りかかったとき、ディフがそれを見つけました。ディフは、天にむかって、ふうつと息をふきかけました。空はたちまち雲におおわれ、強い雨がふりはじめました。

ディフは、使いの者をよびとめて、お茶でも飲んで雨宿りをしないとさそいました。

使いの者は、喜んで水車小屋に入っていました。ディフが、こっそりお茶に眠り薬を入れたので、使いの者は、すぐに眠りこんでしまいました。ディフは、使いの者のポケットから手紙をぬすみだし、手紙をやぶりすてて、こんな手紙を書きました。

「お妃が、ねこの子と犬の子をうみました」

ディフは、その手紙を使いの者のポケットにそっと入れました。それから、また、天にむかってふうつと息をふきかけると、雨はたちまちあがり、お日さまがかがやきはじめました。

使いの者は目を覚ますと、いそいで馬をとばしました。そして、王さまに手紙をわたしました。王さまは手紙を読んで深く悲しみました。けれども、

「たとえねこの子と犬の子をうんだとしても、妃をとがめてはいけない。わしが帰るまで、三人を大切にしてくれ」と、返事を書いて使いの者にわたしました。

帰り道、水車小屋の前でディフが待ちぶせていました。ディフは、使いの者をよびとめて、眠り薬を入れたお茶を飲ませました。そして、使いの者がぐっすり眠っているあいだに、ポケットから手紙をぬすんでやぶりすて、こんな手紙を書きました。

「お妃と子どもたちを、黒いろばの背中に後ろむきに乗せ、三人とも顔をすすでまっ黒にぬって、城から追いだしてしまえ。さもないと、わしは町全体を攻めほろぼすだろう」

使いの者が城に帰ると、手紙は、みんなの前で読みあげられ、大さわぎになりました。

しばらくすると、ディフが黒いろばにすがたを変えてお城の前を通りかかりました。人々は、ろばをつかまえて、お妃と子どもたちを後ろむきに乗せ、顔をすすでまっ黒にして町から追いだしました。

黒いろばは、川のそばまでやってくると、ディフのすがたにもどっていいました。

「おまえのおかげでひどい目にあった。まずお前の子どもたちから食ってやる」

お妃は、

「それなら、きちんと料理して食べないとだめよ。薪を探して火をおこし、くしにさして、焼いて食べるのよ」といいました。すると、ディフは、薪を探しに行きました。

お妃は、まほうの馬のたてがみを取りだしてもやしました。たちまちまほうの馬があらわれました。

「ディフがもどってきたら戦います。ディフもわたしも川に落ちるでしょう。よく見ていてください。水の面に血のあわがうかびあがってきたら、あなたの身に危険がせまります。でも、白いあわがうかんでくれば、あなたは永遠にすくわれるでしょう」

そこへ、ディフが薪を持ってもどってきました。そして、馬を見つけて、おそいかかってきました。ディフとまほうの馬ははげしく戦い、とうとう川に落ちてしまいました。

お妃がじつと水の面を見つめていると、しばらくして、まっ赤な血のあわがうかびあがってきました。お妃は、おどろいて気をうしないそうになりましたが、なおも見ていると、こんどは、白いあわがうかんできました。そして、まほうの馬が、川から出てきていいました。

「ディフをやっつけました。あなたは永遠にすくわれました。さあ、つぎは、私を殺してください。私の首をそばにすて、四本の足は、四つの方角に立ててください。それから、お腹の中からぞうもつを取りだして捨て、ろっ骨の中に子どもたちといっしょにかがみこんでください」

お妃はびっくりしてさけびました。

「わたしをすくってくれたあなたを殺すなんて、どうしてそんなことができるでしょう」けれども、まほうの馬がくり返したのむので、とうとうお妃は、まほうの馬を殺し、首をそばにすてると、四本の足を四つの方角に立て、ぞうもつを取りだしました。そして、ろっ骨の中に、ふたりの子どもといっしょにかがみこみました。

そのとたん、四本の足は、エメラルド色の葉っぱをしげらせた、四本の黄金のポプラの木にかかりました。ぞうもつからは、村や牧草地ができました。ろっ骨は、黄金のお城になりました。首は、銀色にきらきら光る小川になりました。あたりいちめんが楽園になりました。

そこで、お妃は、そのお城で暮し、ふたごの兄弟はりっぱに成長しました。

さて、王さまが城にもどつてくると、お妃も子どもたちもいませんでした。王さまは、悲しみのあまり、まずしい巡礼じゅんれいのすがたになって旅に出ました。

王さまは、あちこちの国を何年もさまよい歩き、とうとうお妃の住む国にやってきました。王さまは、その国の美しさに心をうばわれました。泉まで来ると、お妃の召使いが水をくみにやって来ました。王さまが、

「このお城にはいったいどなたが住んでおられるのですか」とたずねると、召使いは、「ここには、夫をうしなつたお妃さまが、ふたごの王子さまと住んでいらつしやいます」と答えました。王さまは、指輪を外し、召使いの持つている水がめの中に落とししました。そして、

「お妃さまが手をあらうとき、はじめは水を少しかけ、そのあと残りの水を一度にかけてください」といいました。

そのとき、ふたごの王子が泉にやって来ました。そして巡礼を見つけ、お妃のところにかけていいいました。

「お母さま、泉に、まずしい巡礼が立っています。何かめぐんであげるものをください」そして、巡礼のところへかけもどりました。

召使いはお城にもどり、お妃の手に水をかけました。さいごに、残りの水を一度にそぐと、カチンと音を立てて指輪が落ちてきました。お妃が、

「この指輪をどうしたのですか」ときくと、召使いは、泉のそばで会った巡礼のことを話しました。

お妃は、いそいで泉にかけていき、巡礼が王子たちの頭をなでているのを見ました。

お妃は、すぐに王さまだとわかりました。王さまも、お妃に気づき、ふたりはかたくなきあいしました。

それからは、その美しい国で、みんな幸せに、心から満足して暮したということです。

村上郁再話